

中村光夫全集

第九卷

筑摩書房

中村光夫全集 第九卷

昭和四十七年十月二十五日発行

著 者 中 村 光 夫

発 行 者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発 行 所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一一九
電話 東京割 七六五一(代表)
振替 東京 四一 二二三
印刷 株式会社 精興社
製本 牧製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72509 (出版社) 4604

第九卷目次

大人と子供	3
批評についてⅡ	9
文学と世代	23
失はれた「人間」	38
同時代を見る眼	42
批評の態度Ⅰ	51
「新しい小説」をめぐる	57
翻訳についてⅡ	63
文学と年齢	66
今年の文学の課題	71
百年を単位として	74
散文芸術の一面	78
文学の回復——平野謙氏への手紙	83
純文学論争の背景	92

「写真」について	103
批評の方法について	108
自分と他人	111
制作と発見	115
文学に見る戦後十七年	122
硬文学の復活	130
作家と年齢	146
批評の精神——谷川徹三氏に	150
文学の回復	157
偽善と偽悪	163
実社会と文学の虚像	167
自然について	172
文学全集ばやり	177
絶望の中からの希望	180
「新潮」第七百号によせて	187
文学の戦前と戦後	190

批評の態度Ⅱ	202
「現場主義」への疑問	207
「昭和」の意識	212
近代文学の思想	215
言葉の芸術	
序	244
「ある女の遠景」について	258
文語の自覚	272
偏見の必要	285
「オイディプス王」と「鴨」	299
「ヒポリュトス」と「フェードル」	311
「モデル」の問題	333
透谷と独歩	350
「自然」の変質	360
福沢諭吉	374
芸術の観念	384

あとがき	395
自然主義について	397
文学は老年の事業である	410
文芸と新聞	413
劇への誘ひ	420
芸術の幻	
戯作と私小説	424
仮構と告白	439
「よそ」と「うち」	437
「桐一葉」について	476
歴史の蒸発	492
文学における外国	508
非文学的風土	523
「文明開化」の亡霊	539
明治と昭和	555
自然主義・写実主義・風俗小説	558

遠くて近いもの	569
自己と自然	
日記文学について	574
石田英一郎氏	593
「性と虚無」	602
「蒲団」の虚実	612
「役者芸風記」	622
模倣と創造	631
批評の態度Ⅲ	640
現代にとつて文学とは何か	646
母胎からの離脱	651
むかしの「新潮」	660
「ボヴァリイ夫人」の草稿	662
芥川賞について	665
まとまらぬ感想	668
The French Influence in Modern Japanese Literature	686

解説	寺田透
687	
.....	
解題	
699	

文学論
(三)

大人と子供

二三ヶ月まへ、ある大きな雑誌に、「むかしの人はフシギだな」といふ特集がありました。戦前修身の教材になつた美談を小中学生に読ませて感想を書かせたものですが、読んでやりきれない氣持でした。

どうせ道徳教育とかの復活をあてこすつた編集者の思ひつきで、真面目に腹を立てることはないのかも知れませんが、そこで猿のやうに踊らされてゐる子供たちを見ると、いい氣になつた猿まはしの先生たちと、かういふ浅薄な思ひつきの通る今の世の中こそ「不思議だな」と思はずにゐられませんでした。

むろん僕は戦前の修身教育を擁護しようとは思ひません。修身の本といへば、むかしからつまらぬ本の代名詞でした。

そこに盛られた思想が思想の体をなさぬ出鱈目であるのも云ふまでもありません。

しかし、かういふ「美談」をうのみに教へるのも、現代の常識に照らして「批判」させるのも、同じことではありませんか。ここに現はれた子供達の心の動きは、むかしの修身教育のそれを裏返しにした、瓜二つのものです。

彼等はただ、むかしの子供と同じやうに、教はつたことを鸚鵡返しにくりかへしてゐるだけで、批判の対象を理解する能力もなければ、しようともしてゐません。ただ目の前にゐる先生の氣に入る答をしようと努力してゐるだけです。

子供がおめでたい教育家の考へてゐるより、ずつとずるい演技者であることは、だれしも身に覚えがあるはずですが、やはり、こまつちやくれた子供のひとりであつた僕は、彼等がもし成人して、この雑誌を読み返す機会があつたら、さぞ恥かしいだらうと、同情にたへません。

子供が大人の鏡といふのは、子供たちが、いつも敏感に僕等の氣持を読んでゐるといふことです。彼等はどうしたら大人の氣に入られるかを本氣で研究してゐます。

彼等の生活は、ときにはそれが反抗といふ逆説的な形で現はれても、すべて大人の真似から成り立つてゐるので、「批判」も物真似を出ないのは彼等に自然なことです。物真似のなから考へに個性がでてくれば、もう子供ではないのですから。

だからこの場合は、教育家風に云へば「子供は悪くない」ので、罪は彼等に道德問題を論議させた先生やジャーナリストにあります。

子供の生活が社会から道德の訓練を受ける場所である以上（これは学校や「道德教育」などと関係なく、人類が始つて以来行はれてきたことです）、彼等にむかつて道德教育の質問をする頓狂な大人は、どこの世界にもゐるはずがないのです。

今日の日本に、かういふゐるはずのない人間が輩出してしまつたのは、文化の根柢になつてゐる觀念に、重大な間違ひがあるためと思はれますが、そのひとつは、大人の世界は虚偽だが、子供は純潔で天真のままに生きてゐるから、彼等の考へは大人より自然の理になつてゐるといふ思想です。

これはルソーあたりのロマンチック思想にもとづくものでせうが、意外に強い根を我国に張つてしまつたのは、日本の近代文化の特殊事情が働いてゐます。

大人が誠実に生きようとすればするほど内面生活に自信が持てなくなつたため、一方から考へれば、自信がないままですごして行ける甘い条件がそこにあつたのです。

人間の解放が、大人の生活を内面から再組織するところまで徹底せず、子供が理想的な人間像の代用をつとめたといふ事情は、我国の近代文学にも大きな特色をあたへてゐます。

志賀直哉氏が島村利正氏の小説集「殘菊抄」に次のやうな序文を書いてゐます。

「私は戦争中、島村君に色々世話になつた。……狛江の島村君の住ひの方にも板倉の二階一杯に荷物を預かつて貰ひ、この他にも食料の事などで随分世話になつた。島村君はさういふ事を快くしてくれた。……島村君の人柄から来る純粋な感じで、実に気持がよかつた。」

島村君のかういふ人柄は一貫して、どの作品にも恐らく出てゐると思ふ。戦後、度強い小説の多い中に島村君のしんみりした静かな作品は、また、その特徴ゆゑに読者から喜ばれるのではないかと思つてゐる。」

これを読んだとき、僕は何といふことを書く人だらうとあきれました。

島村氏が戦争中志賀氏のためにつくしたと、氏の小説の価値のあひだに何のかかはりがありませう。自分が困つてゐるとき、いろいろな事を「快く」してくれたから、いい人に違ひない、いい人の書いた小説だからよいものに違ひない、といふのは、いくらなんでもひどすぎる推論ですが、氏はまさにかういふ風に云つてゐるのです。

かりによい文章（あるひは更に讀つてよい小説）が、作者によい「人柄」がなければ書けないしろ、その人柄が作品にでるには、長く厳しい修業、あるひは稀有の天分が必要であることを、さういふ天賦の持主である志賀氏はよく知つてゐるはずで。

島村氏の小説にそれが出てゐるといふなら、それもひとつの価値判断ですが、志賀氏の文章は、その点でいつもに似ず弱気で「恐らく出てゐると思ふ」といふ云ひまはしを使つてゐます。

氏がもしこの小説集の作品を全部読んでゐるとしたら、かういふあいまいな表現はしないはずと思はれます。失礼な推測かも知れませんが、氏はおそらく「残菊抄」を「一貫して」読んでゐないので、戦争中、世話になつた人の創作集に自分の名を「快く」貸しただけでせう。

旧恩を忘れぬ現代の美談です。

かういふ風に、筆者の心理に即して見れば、推薦としては体をなしてゐないこの序文も面白い問題を含んでゐます。なかで一番興味があり、いろいろなことを考へさすのは、このぬけぬけとした文章が読者にどういふ効果

をあたへるかに氏がまるで気付いてゐないことです。

もしある役人が、役所に出入の請負業者から金品をもらひ、それを快くくれた相手の人柄が気に入つたから、彼に役所の工事を請負はした、といふやうなことを云つたら、世間の人達はだれしも彼が氣をかしいか、あるひは何かかくれた目的があるとしか思ひません。

志賀氏の場合も同様で、文壇的な考へにならず、志賀直哉が何者であるかを知らぬ人たちがこの文章を読めば、筆者がむかしの恩誼を思ふ氣持からこれを書いたので、實際はその小説に感心してゐるわけでないのを言外にははしてゐるとしか考へないでせう。

この世俗的見解は、案外事態の一面を正しくつかんでゐるのかも知れませんが、少なくとも氏が意識の上でこんな卑劣なことをするはずのない誠実な芸術家であることを僕等はよく知つてゐます。僕はここで皮肉やいや味を云つてゐるではありません。ここに現代文学の問題をとく、ひとつの大切な鍵がかかれてゐると信ずるのです。志賀氏にとつて、文学に身をささげるとは、大人になるのを拒否することでした。大人とは氏には俗物の異名であり、彼等の仲間に加はつて、生來の潔癖な感受性を裏切るのは、氏にたへがたいことであつたし、一たん作家として成功したのちは、名声が比較的容易に氏に子供に近い精神状態を保持することを許したのです。

子供の特権は、近づいてくる人間が、自分にたいする興味と愛情以外の底意を持たぬと信じてゐることであり、自分の言葉がその意図した以外の意味で他人の耳に響くなどと考へもせずになすことだからです。

大人と子供の問題は、論じだしたらきりのないことのひとつでせう。第一僕等がいつも漠然とつかつてゐるこの二つの言葉の意味をはつきり定義することさへほとんど不可能です。

子供と大人とはさうはつきり別物ではないし、大人はみな自分のなかに始末に苦しむ子供を持つてゐます。

しかし明治大正時代のやうに、作家であることの特権と使命が、子供であることと同一視されるやうな風潮はたしかに不思議なものなので、これは図式的に云へば、「帝国」の秩序と權力が重苦しくかぶさつてゐて、国家

の表面的な進歩発展が、内面生活を浸蝕する空白と表裏してゐた時代に、作家の人間解放の意思の挫折の形として、子供に還ることが社会にたいする反抗と見なされたためと思はれます。

「抽象的思索」をきらつて「実感」と「事実」を愛好した当時の文学者氣質もそこに働いてゐたかも知れません。子供はともかく生きた手でさられる理想だからです。

「童心」が作家の大切な宝とされ、童謡、童話などといふ新語がはやつたのは大正時代です。子供とまりつきすの良寛和尚といふ感傷的伝説が一般化したのもこのころです。

この芸術即童心といふやうな不思議な通念が、文壇といふ特殊社会の形成による、作者と読者のなれあひなしに不可能であつたのは、ここにひいた志賀氏の例などからも察せられます。

昭和になつてからこの文壇は次第に崩壊し、文学の社会化が、複雑な経過をたどりながら、徐々に進行してゐますが、かつて文壇で形成された文学概念の根柢は、まだはつきり變つてゐないやうです。

外国の作家たちもむろん子供を彼等の身うちに持つてゐますが同時にかういふ子供たちが、世間の大人からどう見られるかをはつきり意識してゐる大人も彼等のなかに棲んでゐるので、この両者の葛藤に、近代文学の仮構の問題、文体の問題などすべて要約されるといつてよいのです。

昭和時代の著しい特色のひとつは、外国文学の翻訳が、十九世紀以後の小説を中心として盛んに行はれ、前代に考へられなかつたほど多くの読者を得たことです。かういふ小説に養はれた人たちが、子供では通らない世の中との闘ひを自分の生活で経験するにつれ、身近かなはずの日本の小説より、むしろ素材は自分らの身边から遠い外国小説に内面的な親しみを感ずるのは当然です。

よく云はれる文壇小説の狭隘性は、小児性と云ひかへた方がずっとはつきります。

大正時代の作家に、「子供」がどういふ意味を持つたかは、芥川龍之介が「西方の人」で、聖書の「若し改まりて幼な児の如くならずば天国に入ることを得じ」をひいて、「クリストはこの言葉の中に彼自身の誰より幼な児に近いことを現してゐる。……『幼な児の如くあること』は幼稚園時代にかへることである。」と真面目に書

いてゐるのでも察せられます。

くはしい批評は差しひかへますが、ただここで芥川が、自分の引用したばかりのキリストの言葉を、おそらく無意識にかへてゐることを指摘しておきます。

「改まりて幼な児の如くなる」のと「幼な児の如くあること」とは違ふのです。

ドストイェフスキイの生涯を貫いた疑問もまた、キリストは人生に翻弄され、闘ひに破れた子供にすぎなかつたのではなかつたかといふことです。しかし彼は、「世間知に対する輕蔑」などと云つてゐないで、この疑問を徹底的に追求しました。「白痴」のヒポリット、イワンの「大審問官」はこの闘ひの一端を示してゐます。

かういふ外国人のつくつた仮構の人物が、芥川の絶筆より僕等を動かすのは何故でせうか。問題は才能のちがひだけではないのです。

(昭和三十三年四月)